会議要録

会　議　名	第３回港区中学校海外修学旅行事業業務委託事業候補者選考委員会
開 催 日 時	令和５年１２月２２日（金曜日）午後２時から６時３０分まで
開 催 場 所	港区立教育センター　研修室１
委　　員	［出席者］ 増渕達夫、油布佐和子、藤井千春、森山賢一、平部正樹、 長谷川浩義、鈴木健 ［欠席者］ なし
事　務　局	篠﨑玲子（教育指導担当課長）、 下橋良平（統括指導主事）、 澤木俊宏、堀内遥、小林あかり（教育支援係） ［オブザーバー］ 佐々木希久子（港南中学校長）
会 議 次 第	１　開会 ２　二次審査実施概要について ３　プレゼンテーション及びヒアリングの実施について ４　二次審査結果及び事業候補者の選定について ５　閉会
配 付 資 料	［配付資料］ 資料１　二次審査実施概要 資料２　二次審査採点基準表（４事業者分） 資料３　二次審査における共通質問事項趣旨 資料４　一次審査・二次審査集計結果（※採点終了後に配付） 資料５　第２回港区中学校海外修学旅行事業業務委託事業候補者選考委員会会議要録（案） 参考資料１　一次審査集計結果 参考資料２　港区中学校海外修学旅行事業業務委託事業候補者選考基準 参考資料３　仕様書

会議の結果及び主要な発言	
事務局	１　開会 ２　二次審査実施概要について （資料１から３までの説明） →　意見なしで了承 ３　プレゼンテーション及びヒアリングの実施について 【Ａ事業者】
Ａ事業者	<プレゼンテーション> （企画提案書の説明）
Ｂ委員	<ヒアリング> 中学生の修学旅行先をシンガポールとすることの教育的意義について、どのように認識しているか。
Ａ事業者	国際性を十分に発揮できないと諸外国に勝っていけないため、国際性を磨くことは従来の修学旅行より意義があると考えている。
Ｂ委員	その認識を踏まえ、中学生のシンガポールへの修学旅行の意義を具体化した企画として最も強くアピールしたい企画は、様式７の企画提案書のプログラム内容のうちのどの内容になるのか。
Ａ事業者	現地学生との交流である。実際のコミュニケーションにおいては、現地の学生とすることが一番大きいと思う。現地でしかできない体験をすることが意義になると思うが、現地で生活しており、学生という似たような境遇の人と触れ合うということに一番大きな意義があると考えている。
Ａ委員	これまでの業務実績を見ると、高校生の団体旅行が多い。中学生と現地学生だと年齢差があるため高校生とは違うと思うがいかがか。
Ａ事業者	大体３歳から６歳までの年齢差があると思っている。知らない土地、特に海外であると生徒の不安も大きいと思う。少し年上の学生と交流することによって安心感があり、頼りになる場面も出てくると思うので、意義があると考えている。
Ｄ委員	班は何人くらいか。また、現地学生のオリエンテーションはどのように考えているか。
Ａ事業者	基本は生徒４名につき現地学生１名を想定している。事前に現地の学生にオリエンテーションをする。事前学習で現地とつないで顔合わせを行い、当日は午前中にホテルのバンケットで話合いをして実際の行程を確定してから出発する想定である。
Ｄ委員	今までどのくらい現地学生が登録しているのか。

Ａ事業者	登録は約２００名である。
Ｃ委員	プログラム担当Ａ社との記載があるが、具体的にプログラムのどの部分をＡ社が担当するのか。御社とＡ社はどのような関係か。
Ａ事業者	行程で言うと、２日目の現地校との交流から夕食が終わるまで、３日目のセントーサ島の観光と現地での体験学習、ナイトサファリ、４日目の朝食後から午後の視察、現地学生との振返りまでを担当する。事前事後学習については、事前学習５回のうち１回目と３回目、また、事後学習についても予定している。Ａ社は普段から付合いがある会社で、目指すものが合致するため、今回Ａ社と協力することとした。
Ｃ委員	Ａ社について要望がある場合は御社を通じてというかたちでよいのか。Ａ社に不備が生じた場合の対応も御社がするのか。
Ａ事業者	弊社が区と契約するため、そのように対応する。
Ｃ委員	事前学習のファシリテーターと現地に行く担当者は同じか。
Ａ事業者	弊社については同一の人物が対応する。Ａ社については、基本的に同じ人物が行けるように予定はしている。
Ｂ委員	２日目の現地学生との交流について提案書には４つの大学と記載がなかったが、その説明をしてほしい。また、４日目の学生は２日目と同じ学生か。
Ａ事業者	提案書は一例として記載した。学校については現在調整中であり、４つの大学の中から手配が可能となる。２日目の学生と４日目の学生については、基本的には両方来ることができる学生を予定している。
Ｂ委員	実地踏査で実際に訪れる部分は協議すると記載があるが、行けない場合もあるのか。
Ａ事業者	実地踏査については、本事業が初めての試みであるため、実際に行く場所に行かないと意味がないと思っており、実際に行く場所に行くかたちになる。
Ｄ委員	プログラムの活動はＡ社に委託して行うと思うが、読んでいくとＳＤＧｓの部分は、場所は示されているが、内容はあまり明確ではない。Ａ社と決める必要があるのか、御社はどのような関わり方をするのか。
Ａ事業者	全体的なプログラムはＡ社が担当するが、弊社が全体の流れについては教育委員会と協議する。
Ｄ委員	企画提案書に記載しているのは、あくまでも今提示できる部分で、詳細については今後詰めるという意味か。
Ａ事業者	そうである。要望があるかと思うので、それを伺った上で協議させてもらいたい。

Ａ委員	効果検証について、一例で構わないので、これまでの実績の中でどのような効果が確認されたか教えてほしい。
Ａ事業者	Ａ社の方で検証スキームの開発をしており、企画提案書に具体例を記載している。詳細な効果については直接提供していないので、この場では具体的な回答はできないが、実績はある。
Ａ委員	２日目、３日目の食事はミールクーポンで対応するのか。
Ａ事業者	海外に行く経験の一つとして、ものを頼んでそれを食べるというのはハードルが高いが、要望に応じて対応したい。食事場所を設定してほしいということがあれば、その点についても対応する。
Ａ委員	ミールクーポンの対応の時に気になるのはアレルギーの対応であるが、どのように対応するのか。
Ａ事業者	アレルギーについては、事前に書類で情報をもらう。添乗員やガイドがサポートし、別の食事を提供することもできる。
Ｅ委員	特別な配慮を必要とする生徒に最大限の配慮をすると記載があるが、最大限の配慮とはどのようなことか。
Ａ事業者	これまでの修学旅行でも生徒に応じた対応が必要になっており、一概にこうであるとは言えないと思うので、各学校の先生方と対応については協議したいと考えている。現場の方から要望があれば、迅速に確認した上で事前に回答し、安心して出発できるようにしたいと思っている。 （ヒアリング後、各委員がＡ事業者について採点） 【Ｂ事業者】 <プレゼンテーション> （企画提案書の説明）
Ｂ事業者	 <ヒアリング>
Ｂ委員	中学生の修学旅行先をシンガポールとすることの教育的意義について、どのように認識しているか。
Ｂ事業者	長年修学旅行の案内をしているが、修学旅行期間中の生徒の成長度合いはものすごく目を見張るものがある。今まで小学生の時から英語を学んできていても、話すチャンスというものはなかったと思う。海外に行くことで「英語が通じた」という気持ちや「まだまだ通じなかった」という思いを持つことが海外の修学旅行ならではであると思う。生徒にとっては一大イベントになる。まずは、英語の成果や、シンガポールという特別な環境で生徒が一回り大きくなるということを願っている。
Ｂ委員	その認識を踏まえ、中学生のシンガポールへの修学旅行の意義を具体化した企画として最も強くアピールしたい企画は、様式７の企画提案書のプログラム内容のうちのどの内容になるのか。

Ｂ事業者	一番のポイントはイングリッシュチャレンジプログラムである。単なる街歩きではなく、英語のアウトプットを実践することに重きをおいたプログラムである。様々なエスニックタウンをフィールドワークして、英語のアウトプットをしてもらいたい。そして、英語が通じる喜びやもっと勉強したいという機会を重視したい。
Ｃ委員	シンガポールへの修学旅行は何回か経験したことはあるのか。また、経験をどのように反映しているのか。
Ｂ事業者	シンガポールへの修学旅行は何回も経験している。大人は教育的効果を考えすぎてしまうが、楽しいと思いながら実は学びにつながっていたという仕掛けを作っていきたいと考えている。２番目の弊社の売りは探求型プログラムである。探求型のプロセスは興味・関心が必要だと思っており、やらされる感ではなくて、シンガポールに行って実際にこんなことやってみたいという最初の仕掛けを事前学習で設けて、当日につなげていきたいと考えている。
Ｃ委員	具体的なセールスポイントがあったら教えてほしい。
Ｂ事業者	英語の仕掛けについては記載したが、英語でのリサーチやインタビューばかりやると飽きてしまう。現地の学生との観光もあるので、緩急をつけてやることが大切だと思っている。行先についても、生徒が行きたいところを織り交ぜる。
Ｃ委員	２日目または３日目のプログラムでのポイントについて教えてほしい。
Ｂ事業者	３日目について、セントーサ島はレジャーアイランドであるが、中学生なので１日中ずっと散策するというのは心配な部分があると思う。そのため、セントーサ島でのアカデミックプログラムも準備した。平和的な内容を扱うプログラムやキャリア学習的なプログラムも入れている。セントーサ島でただ遊ぶだけではなく、学びもできるということも半日入れている。
Ｄ委員	セントーサ島のプログラムだが、午後は割と自由にさせるという理解であっているか。
Ｂ事業者	しっかり勉強して、リゾートを遊ぶということも学習の一つになるので、午後は４人班で自由に行動してもらう。何かあった時にすぐ駆け付けられるように生徒の位置がリアルタイムでわかるシステムを添乗員と教員が持っているようにする。また、６５１件の生徒のアンケートをみたが、ユニバーサル・スタジオ・シンガポールを楽しみにしている生徒が多かった。生徒の修学旅行にかける思いも十分に分かるので、プログラムだけではなく、生徒に喜んでもらいたいという気持ちがある。
Ｄ委員	高校生の修学旅行と中学生の修学旅行は違いがあると思うが、一番気を付けている部分はどこか。
Ｂ事業者	パスポートを置き忘れたなど、色々なトラブルがある。中学生の方が年齢的に若いので、不測の事態が起こりやすい面もある。弊社は中学生の修学旅行の方が実績が多いので、その経験を生かしてやっていきたい。

Ｄ委員	プログラム内容で中学生と高校生の違いはあるのか。
Ｂ事業者	中学生と高校生でプログラムの枠組みは変わらない。今回は英語の先進教育をしている港区ならではのプログラムの内容にしている。
Ａ委員	一つ一つが考えられた濃密なプログラムだと思うが、濃密すぎて息が詰まるのではと考えるがいかがか。
Ｂ事業者	例えば、イングリッシュチャレンジプログラムをやるにしても、レベル感をアジャストすることができると思う。英語のチャレンジをするにしても、ミッションの調整ができるので、港区の先生方と協議をしたい。レベル感や探求プログラムもしっかり話して、港区のレベルに合わせてゴールを調整したい。
Ａ委員	ＡＩを用いて効果検証することの具体的なイメージが持てない。既に実践されていると思うが、具体例があれば紹介してほしい。
Ｂ事業者	修学旅行は短い期間ではあるが、変化をもたらす行事である。行動特性を事前に測り、修学旅行の後にどのように変化するか数字で見ることができる。３５，０００ものデータをもとに効果の測定を行うので、成長度合いを測ることができる。生徒個人の行動特性を教員に実感・検証してもらうプログラムとなっている。
Ｄ委員	御社が開発したものなのか。
Ｂ事業者	弊社が開発したものではないが、長期の留学の効果検証でも活用されているもので、評価が高いものである。
Ｂ委員	効果検証において、具体的にどのようなかたちで事前事後のフィードバックをするのか。
Ｂ事業者	先生に対しては、生徒がたくさんいるので、分布図、数値化されたものが提示される。事前事後の数字、分布図の変化として効果を読み取ることができる。生徒については、いわゆる個人レポートとして気質等が数字や棒グラフで提供される。
Ｂ委員	先生が個人面談で活用できるようなフォローアップもしてもらえるのか。 また、現地の学生の事前の研修、特に緊急対応のやり方をどうするのか教えてほしい。
Ｂ事業者	フォローアップはもちろん行う。現地学生の研修は、港区の趣旨を伝えて指導することにしている。指導はシンガポールの語学学校の先生が行う。日本に興味を持っている現地学生をリクルーティングして、事前指導をする。
Ｂ委員	リクルーティングが大変だと思うが、具体的に選定はどのように行うのか。
Ｂ事業者	過去の傾向を見て、評判の良い学生を選ぶ。評判の良い学生からの紹介もしてもらい、面接で判断する。

Ｃ委員	事前事後学習をする御社の職員は、シンガポールにも同行するのか。
Ｂ事業者	経歴の長い職員をリーダーにして、部下と一緒になって、それぞれの中学校に行き、事前事後学習を進めていく。
Ｃ委員	部下の方は同じチームの中にいるということか。
Ｂ事業者	そうである。チームで学校をサポートしていくということである。
Ｃ委員	シンガポールにも同行するのか。
Ｂ事業者	基本的にはリーダーがシンガポールに同行する。
Ｃ委員	生徒からすると、海外では不安になるので、頼りになる大事な存在になると思う。
Ｂ事業者	顔を見知った人間が最初から最後まで付き添うことが大事だと思っている。クオリティコントロールの面はワークショップ設計の資格を持っている私も行う。
Ｇ委員	修学旅行を多く請け負っているという実績をみた。中学生から多く寄せられた意見としてどのようなものがあったのか、そのことを企画提案書にどのように反映されたのか。
Ｂ事業者	修学旅行は学習的効果を期待して企画してしまうが、単純な気付きがある。単純な気付きは大事なものであり、グローバル化の社会の中で多様性を理解して考え方の違う人とやりあっていくために必要な素養だと思う。そのため、ちょっとした気付きを得られるプログラムや企画を用意している。
Ｅ委員	特別な配慮が必要な生徒への対応ということで、専門的な知見で参加可否の判断をいただくと記載があるがそれは必ず必要なのか。
Ｂ事業者	うちの子を連れていってもよいかというのは明確に答えづらい点もある。主治医の先生のお墨付きがあって、現地で付き添えるのが基本である。まずは相談をしてほしい。２４時間の受付もするので、まずは問合せをいただき、特別な配慮が必要な生徒の情報がほしい。親御さんと一緒になって、その子にとって一番良い手法を考えたい。必要な情報はしっかりとしたルートでほしいので企画提案書に記載した。 （ヒアリング後、各委員がＢ事業者について採点） 【Ｅ事業者】 <プレゼンテーション>
Ｅ事業者	（企画提案書の説明） <ヒアリング>
Ｂ委員	中学生の修学旅行先をシンガポールとすることの教育的意義について、どのように認識しているか。

Ｅ事業者	２点ある。１点目は、シンガポールが英語圏であることである。英語に関しては、港区は非常に力を入れており、小学校から具体的なカリキュラムの中に取り入れている。２点目は、多民族国家であるということである。シンガポールであれば、マレーシアや中国等、いろんな人との交流、また、異文化を学ぶ機会がたくさんあると認識している。日本人としてのアイデンティティを学ぶ上では、最高の行き先だと考えている。
Ｂ委員	その認識を踏まえ、中学生のシンガポールへの修学旅行の意義を具体化した企画として最も強くアピールしたい企画は、様式７の企画提案書のプログラム内容のうちのどの内容になるのか。
Ｅ事業者	３日目のセントーサ島並びにシロソ砦でのプログラムである。Ｂ＆Ｓのような英語を学ぶ機会のプログラムは当然重要だと思うが、やはり日本の歴史・シンガポールの歴史を知る上で平和学習ができるということはポイントが非常に高いと考えている。平和学習については、日本人としてのアイデンティティや多民族国家であるシンガポールについて改めて認識できるプログラムだと思う。
Ｄ委員	３・４日目について質問が２つある。１つ目は、それぞれのプログラムにワークシートを利用するとの記載があり、その活用事例について教えてほしい。２つ目は、３・４日目のタイムスケジュールについて生徒たちがどのような動きをするのか説明してほしい。
Ｅ事業者	ワークシートは、弊社オリジナルであり、英語のレベルだと高校２年生程度が一番適してる用語を扱っているが、港区用にアレンジして作成する。３日目について、セントーサ島で半日程プログラムを体験した後に、国立博物館等の市内に移動する。４日目については、市内の企業の訪問であり、７つ提案している中で２つ参加できるようなスケジュールになっている。なお、４日目はＳＤＧｓに着目したプログラムで港区の教育推進計画等の内容に即したかたちで提案をした。
Ｆ委員	これまで、港区の学校とのつながりがあると伺っているが、その経験の中で今回の提案に一番生きているところは何か。また、今回おすすめとしてシロソ砦のプログラムを挙げたが、選択であるためそのプログラムが強調されると多くの生徒が学びたいと思い、要望が増えると思われるがそのあたりの対応は可能か。
Ｅ事業者	これまでの港区の修学旅行の取扱いが多いメリットは、課題や特別支援学級の対応等の経験を得たことである。海外の修学旅行においては、出発までの間がタイトなスケジュールであり、学校との信頼関係をもとに、今まで海外修学旅行を経験していない先生が安心して、生徒の引率ができる環境を整えたい。また、事前にリスクマネジメントセミナーの開催を追加提案している。先ほど推薦したシロソ砦のプログラムは、人数に限りがあるため、時間差を設けるなどする。
Ｅ委員	特別な配慮が必要な生徒への対応について、１点目として専属の現地ガイドの追加手配について、スキルや経験は考慮されるのか、また、２点目として保護者から様々な個性に応じた相談があると思うが、それに対する対応・体

	制についてどのように考えているか。３点目は、現地学生の確保について、港区の中学校はおよそ１２０名規模の生徒がいるがこれまで同規模に対応する学生を確保した経験はあるか。
Ｅ事業者	１点目の現地ガイドについて、特別な配慮が必要な生徒については現地で案内をした経験のあるガイドを採用する。また、車椅子の生徒の対応が可能なバス会社と提携しているため、通常学級と同じ体験ができるよう配慮する。２点目の保護者対応について、専用回線を開き、連絡がとれる体制を整え、保護者からの要望や学校との打合せ内容について組織として対応する。また、特別な配慮が必要な生徒をもつ保護者の不安を取り除くために、事前に説明会を各校で開催する。３点目の現地学生の確保について、Ｂ＆Ｓプログラムを運営する会社が、シンガポールの大学に、日本人の学生との交流に興味がある学生という条件で募集し、面接の上で採用している。現地学生が用意できなかったことは今までないため、確保できると考えている。
Ｂ委員	緊急時の対応方法の徹底とは具体的にどのようなことを考えているか。
Ｅ事業者	現地の添乗員を通じて学校の先生へ報告し、状況の正確な把握をした後に現地支店に連絡をする。警察や消防等が必要であれば、現地支店を通じて、もしくはガイドが速やかに対応をする。大きな事故があった場合は、現地で緊急の本部を立ち上げ、学校の先生、保護者、教育委員会にも、タイムリーに追加の情報を共有していく。
Ｂ委員	現地学生の事前研修としての緊急時の対応方法については具体的にどういうことを想定されているか。
Ｅ事業者	研修中に体調不良者がでた場合、現地学生から責任者に連絡をする。その後添乗員に連絡が入り、駆け付ける必要があるのか等の判断をする。そういった体制について事前に各学生にマニュアルとして配付し、学生も役割を認識して緊急時の対応をする。
Ｂ委員	現地学生の緊急対応の徹底とは、マニュアルを配付して、学生に確認するように指示をするという理解でよいか。
Ｅ事業者	そのとおりである。学生には直接レクチャーをすることで、緊急時の体制を万全に整える。
Ｂ委員	レクチャーとは事例演習をするということか。
Ｅ事業者	事例演習とまではいかないが、基本的な対応についてケーススタディを行い、現地学生に具体的に説明をして対応してもらう。
Ｂ委員	効果検証について、効果測定システムを活用するとあるが、学校の先生にどのように説明されるのか。また、ゲストスピーカーを呼ぶ理由について伺いたい。
Ｅ事業者	効果検証については、マニュアルに基づいて、スケジュールや方法について説明をする。また、タブレットを利用するため、学校のＩＣＴ担当の先生との打ち合わせを設ける。このゲストスピーカーを選定した理由については、

	シンガポールと日本の文化の両方に造詣が深い講師がふさわしいと考え、現地でそういった活動をしていたため選定した。
Ａ委員	食事について、２日目の昼食は自由となっているが、班別に行動する中で、ミールクーポン等で対応することを想定しているか。
Ｅ事業者	２日目の昼食は、午前中のキャンパスツアーが終わってから昼食をとる。コミュニケーションの中で、例えば現地の学生が紹介したお店を生徒に案内した場合は、一緒に行って食べることを想定している。また、プリペイドカードがシンガポールにはあるため、現地で使うこともできる。
Ａ委員	アレルギーの子どもへの対応についてどのように考えているか。
Ｅ事業者	事前に先生を通じて、保護者と連絡をとり、食べられない食材を確認して、あらかじめ学生に伝える。ただし、それだけだと不安な生徒もいると思うため、アレルギーが強い生徒は、例えばアレルギーに配慮した弁当やランチパックを用意することを考えている。
Ａ委員	相談体制について、９時半から１７時３０分までと記載があるが、時間帯が限られると対応しきれないと思うがそれについてはいかがか。
Ｅ事業者	平日の時間帯での電話回線は、専用回線をオープンする。並行して、オリジナルのメールアドレスを作成したいと考えている。例えば緊急性がないものはメールで対応し、月曜日に返信または折返しの電話対応をしたいと考えている。ただし、緊急トラブルに関しては２４時間体制で対応したいと考えている。 （ヒアリング後、各委員がＥ事業者について採点） 【Ｆ事業者】 <プレゼンテーション> （企画提案書の説明）
Ｆ事業者	 <ヒアリング>
Ｂ委員	中学生の修学旅行先をシンガポールとすることの教育的意義について、どのように認識しているか。
Ｆ事業者	シンガポールといえば人種のるつぼであり、多様性を知るには、シンガポールだと考える。シンガポールの水のほとんどをマレーシアから購入しているが、それはおそらく現地に行かないと学べない。また、シンガポールが成功したのはハブ空港としての拠点が成功し、様々な空港のターミナルになっているからである。このように、国土や資源がなくても、経済市場ができるということが分かることからシンガポールが良いと考える。
Ｂ委員	その認識を踏まえ、中学生のシンガポールへの修学旅行の意義を具体化した企画として最も強くアピールしたい企画は、様式７の企画提案書のプログラム内容のうちのどの内容になるのか。
Ｆ事業者	例えば、プラスチックを大量に作ることによって必ずごみになってしまう

	問題や、シンガポールは日本食が飽和状態であるがさらに広げることができないか、観光地として定番化している場所の他に何かないか等について考え、答えのない勉強をすることが肝だと思う。事前のインプットが大事で、それに対してどうだったか検証することが重要だと考える。
Ｃ委員	今の説明は最もだと思うが、中学生のレベルには高度すぎないか。あるいはもりだくさんすぎないか。中学生のレベルに分かりやすく、的を絞って説明してほしい。
Ｆ事業者	質の高い教育プログラムを提供したいと思い提案したが、実際はかみくだいて中学生に説明する。事前学習ではシンガポール現地とつなぐハイブリッド型で行い、平易なかたちで説明する予定である。
Ｃ委員	例えば、シンガポールには伝統的屋台が多いが、食べ物が腐りやすく冷蔵庫が必要など、何か特色の切り口から日本と比べさせる仕掛けがよいと思うがいかがか。
Ｆ事業者	シンガポールは土地が少ないので、住宅が高く、マンションが政府の政策で並んでいる。共働きが多いので、近くには市場があり、なるべく周辺で完結できるようにするといった特徴も日本での生活とは違うため、それもかみくだいて説明したいと思う。
Ｄ委員	とても面白いプログラムだと思うが、例えばディスカッションして発表する活動は事前学習のときと同様にオンラインでもできるのではないか。シンガポールにいることの意味が見えない気がするが、それについてはいかがか。
Ｆ事業者	実際に事前学習で既にオンラインでつながっているため十分かもしれないが、もう一つの意味は外国人と初めて対面で話す前に一度準備ができることである。先ほど難しいのではないかという話があったが、確かにそのとおりであり、中学生が大学生とまともに話すのはハードルが高いが、シンガポールの大学生には相手が中学生であることを周知するほか、日本が大好きな日本語研究会の人を呼ぶため、容易な内容にすることは可能である。シンガポールの大学でやり、キャンパスツアーに参加できることが重要である。
Ｅ委員	特別な配慮が必要な生徒への対応について、これまでの経験を差し支えのない範囲で教えてほしい。また、現地の学生を、日本語研究会を中心に手配するとのことだが、港区だと１２０人規模に対応する人数を集める必要があり、その確保の手段はあるか。
Ｆ事業者	特別な配慮が必要な生徒への配慮については、リフト付きのバスを手配する。ハンディキャップルームを手配し、現地を確認して、空港がどういうかたちでバリアフリーになっているのか見学する。食事に関しては細かく配慮し、現地と連携しながら対応する。ホテルに関しては、バリアフリールームが２部屋あるが、それ以外にも全部屋に車いすで入ってもらえる。また、シンガポール公立大学のＦ氏が客員教授をしているので規模に対応する人数については確保できる。
Ａ委員	食事について、２日目の昼食はＢ＆Ｓで、３日目はユニバーサル・スタジ

	オ・シンガポールを予定しているが、アレルギーの対応はどうするのか。
Ｆ事業者	まず、Ｂ＆Ｓの際は事前に学生にアレルギー情報を共有しておく。アレルギーが重い場合は、食べる場所を特定してガイド等が同行する。ユニバーサル・スタジオ・シンガポールの場合は前もって内容を確認しておき、お知らせを行う。
Ｂ委員	事後指導の学習のところで、生徒たちが感想を書いて一つ一つに対して、コメントを返却するとあるが、Ｆ氏はこういった経験もあるということなのか。
Ｆ事業者	経験もあり、コーディネートしてくれたＦ氏から直接のコメントをもらうと嬉しいと思うので、アナログな面があってもいいと思う。
Ｂ委員	２日目は学生とキャンパス歩き、３日目はフリータイムとあり、具体的な計画がないが、そのあたりを危惧している。
Ｆ事業者	どこを回るかというのは我々がシステムを使って、どういう班別行動にするかを考える。各校の担当者が伺ってコース作りのお手伝いをさせていただく。
Ｂ委員	コース作りの手伝いはいつ行うのか。
Ｆ事業者	出発の前の事前学習の時に行う。国内の修学旅行と同様のかたちである。
Ｃ委員	シンガポールの気候はどうなのか。もし雨とか大雨の場合や熱中症になった場合、街歩き等はリスクがあると思うが、どのように対応するか。
Ｆ事業者	熱中症対策についてはミネラルウォーターを事前に用意しておく。班別行動についてはスマートフォンを各班に１台貸出を行い、連絡を密に取り合うようにする。
Ａ委員	効果検証についてメソッドの説明はあったが、これまでの修学旅行でも活用していると思うので、この効果検証を行うメリットを過去の例示も含めて教えてほしい。
Ｆ事業者	効果検証については、タブレット上で何回も行うことができる。クラスの中での立ち位置も分かり、担任の先生は全て見ることができるので生徒がどういう状態なのか分かる。
Ｇ委員	企画提案書を見ると多くの高校の修学旅行の経験があり、実施後の意見や感想があったかと思うが、企画提案書にはどのように反映しているか。
Ｆ事業者	学校ごとに先生に感想をもらうが、それで終わってしまうので、我々としてはそういう検証ができない。
Ｃ委員	Ｆ氏に実施してもらうのは初めてなのか。
Ｆ事業者	初めてではない。

Ｄ委員	セントーサ島のプログラムの提案は能動的なものではないように思うが、生徒の活動をどのようにするのかの具体的なイメージがあるのか。
Ｆ事業者	あんまり能動的にするのもつらいかと思っている。ボリューム自体はある。学校の声を聞いて柔軟に対応する。 （ヒアリング後、各委員がＦ事業者について採点）
事務局	４　二次審査結果及び事業候補者の選定について （資料４を配付して採点の集計結果を説明）
Ｄ委員	【二次審査の講評】 Ａ事業者はプログラム内容を別会社に委託しており、他の３社と比べて採点を低くした。 Ｂ事業者は、オリジナルなプログラムができている。中学生の修学旅行として適切ではないか。安全や危機管理の面でも優れていた。 Ｅ事業者は、プログラム内容を業者に丸投げしていないというところでＡ事業者よりもよかった。 Ｆ事業者は、面白いとは思ったが、プログラム内容が具体的であればよかった。意気込みは感じたが他よりも劣る。 全ての面で、網羅的によかったのはＢ事業者である。
Ｃ委員	Ａ事業者は、業務提携でプログラム内容を別事業者に委託しているのがひっかかった。プログラム内容についての理解や蓄積が乏しい。提携する会社が見えてこないので危うく感じた。 Ｂ事業者とＥ事業者は、甲乙が付けがたい。両事業者ともに実績があり、安定性がある。 Ｆ事業者は、独創的で面白いが、本当に実現できるのかという点で危うさがある。
Ｇ委員	Ａ事業者は、業務提携が悪いという訳ではないが、関係性が見えないので課題がある。 Ｂ事業者は、実績があり、生徒に寄り添ったプログラムであるとみられた。修学旅行が教育であることを強く意識している提案であったため高く評価した。 Ｅ事業者は、全体としては安定的であったが、Ｂ事業者に比べると強く感じる部分はなかった。 Ｆ事業者は、実現性に疑問があり、明確さに欠けるように思った。
Ｆ委員	Ａ事業者は、分かりやすかったが、発展性については感じられなかった。 Ｂ事業者は、提案書もよくできていた。これまでの経験がプログラムに落とし込まれており、他事業者よりも明確だった。 Ｅ事業者は、分かりやすかったが、具体的なプログラムはこれから詰めるのかなと感じた。港区のことはよく把握している。 Ｆ事業者は、内容は面白かったが、プログラムにどう落とし込んだのかは分かりにくかった。Ｆ氏個人に頼りすぎているのはリスクが高いと思う。
Ｅ委員	実現可能性の部分に軸足を置いて評価した。

	Ａ事業者は、ガイドや現地学生の確保について確実性が見込めるので高く評価した。 Ｂ事業者は、細部まで緻密に練られており、完成度が高く、経験も豊富である。 Ｅ事業者は、中庸な内容である。 Ｆ事業者は、企画提案書を超える内容がうかがえなかった。
Ａ委員	事務局に確認したいが、Ａ事業者は単独で申込みをしているのか、それとも共同事業体で申込みをしているのか。
事務局	単独での申込みである。
Ａ委員	Ａ事業者は、単独ということであれば再委託ということになると思う。プログラムの肝心な部分を他社に任せてしまうというのは判断に悩んだが、再委託の許可を得ればよいのかなと思った。内容はしっかりしたプログラムであったので減点はしなかった。プレゼンテーションは良い評価をした。 Ｂ事業者は、減点する要素がなかった。内容についても具体の説明ができていた。区が行ったアンケートも全て見ているのも信頼できる。 Ｅ事業者は、回答がいまひとつかみ合っていなかった。ポイントとしてシロソ砦を挙げていたが、それは違うのではないかと思った。 Ｆ事業者は、Ｆ氏への依存度が高すぎて、欠けたらこのプログラムは台無しになってしまうというリスクが高いと思った。
Ｂ委員	Ａ事業者は、海外修学旅行の教育的意義が英語学習に偏っており、多文化理解に関する視点が弱かった。内容も柔軟に対応できるのか疑問であった。 Ｂ事業者は、プレゼンテーションがよく、企画提案書もよく練られておりよかった。 Ｅ事業者は、趣旨や内容もよかったが、Ｂと比較すると発展性がいま一つであった。 Ｆ事業者は、プレゼンテーションで勢いはあったが、計画にフリーな部分があり、心配である。
委員長	【意見交換】 各委員からの講評を踏まえ、意見交換をしたい。特に、５段階評価において、委員間で３以上の差がある項目について確認したい。 ＜Ａ事業者について＞ ２　提案の実現性 →　Ｄ委員：２　Ｇ委員：２　Ｅ委員：５
Ｄ委員	プログラムの一番肝心な部分を委託するということで、低く採点した。
Ｇ委員	Ｄ委員と同じ意見である。
Ｅ委員	アウトプットの部分だけに着目しすぎた。満点は付け過ぎであるので評価を下げたい。 ＜Ｅ事業者について＞ ３　提案の発展性

	→　Ｃ委員：５　Ｇ委員：２
Ｃ委員	安定的であり、特に問題はないと判断したためこの点数にした。
Ｇ委員	Ｂ事業者との比較の中でこの点数になった。 ＜Ｆ事業者について＞ ３　提案の発展性 →　Ｃ委員：５　Ｇ委員：２
Ｃ委員	独創性の点で評価した。満点は付け過ぎであるので評価を下げたい。
Ｇ委員	全体を通して安定的であるが、内容としてはインパクトに欠けたので評価を低くした。 （意見交換を踏まえて各委員が採点を見直し、事務局が再集計）
事務局	【事業候補者の決定】 （再集計結果の説明）
委員長	二次審査の評価点数については、この点数で決定してよろしいか。 （異議なし）
委員長	それでは、この点数のとおり決定する。この点数の結果をもって、当委員会として、最も得点の高いＢ事業者を事業候補者として決定してよろしいか。 （異議なし）
委員長	それでは、そのとおりに決定する。事業候補者であるＢ事業者と契約が不可能となった場合に備え、二次審査の得点が６０％以上となっている事業者の順位付けを行う。Ａ事業者、Ｅ事業者、Ｆ事業者のいずれも６０％以上の得点をしており、一次審査及び二次審査の合計得点で順位付けを行うと、第２位はＥ事業者、第３位はＡ事業者、第４位がＦ事業者となるが、この順位に決定してよいか。 （異議なし）
委員長	それでは、そのとおりに決定する。 →　Ｂ事業者を事業候補者とすること、第２位をＥ事業者、第３位をＡ事業者、第４位をＦ事業者とすることを決定 ５　閉会